

たまらん坂

武蔵野
短篇集

黒井千次
kuroi senji



たまらん坂

黒井千次

kuroi senji

福武書店



黒井千次（くろい・せんじ）
一九三二年、東京に生まれる。東京大学経済学部卒。六九年、『時間』で芸術選奨新人賞受賞。八四年、『群像』で谷崎潤一郎賞受賞。著書として他に『走る家族』『禁城』『夢のいた場所』『五月巡歴』『春の道標』『隠れ鬼』など多数。

たまらん坂

一九八八年七月一五日 第一刷発行
一九八八年九月二〇日 第三刷発行

定価一四〇〇円

著者 黒井千次

発行者 福武總一郎

発行人 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南一三二二八
〒102 電話 (03) 1130-1131
振替口座 (東京) 六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

たまらん坂
目次

たまらん坂

7

おたかの道

47

せんげん山

73

そうろう泉園

105

のびどめ用水

135

けやき通り

161

たかはた不動

205

裝丁菊地信義

たまらん坂

武蔵野短篇集

たまらん坂

登り坂と降り坂と、日本にはどちらが多いか知っているかい、とビールのコップを置いた飯沼要助が急に真顔で訊ねて来た。

はて、と虚を衝かれて私は考えこんだ。

日本列島の脊梁には山脈が連っているのであるから、これは当然登り坂の方が多いような気がするが、一方、山の頂きから見下せば常に降り坂だけが足許から延びているわけであり、こちらの数も案外馬鹿にはならないぞ、と首を捻った。

なんだ、登り坂とはつまり降り坂のことではないか、と思い当るまでにほんの僅かの時間しか費しはしなかったが、それでも相手は私の一瞬の戸惑いを見逃さず、にやりと表情を崩して愉快そうに天井を振り仰いだ。

やられた、とすぐ気がつきはしたものの、その口惜しさより、戸惑いの内にちらりと覗いた

なにやらひどく透明な感覚の渦のようなものの方が遥かに強く私を捉えた。留め金が外れ、ぐらりと視界が動く感じだった。突然生れた渦の底に音もなく吸い込まれていくのに似た奇妙な目眩と戦きを覚えた。幾重にも重なり合う登り坂の向うに透き通った降り坂の群れが犇めき、その間から考えてもみなかった未知の拡がりが浮かび上って来る。

実際、もしも日本には降り坂の方が登り坂より千九百三十七多いのだ、などと判明した時の驚きはどう説明したらよいのだろう。

ただどな、とビールのコップの表面についた水滴を親指と人差指の腹でゆっくり撫で下しながら口を開いた飯沼要助の顔には、先刻とは違う妙にしみじみとした表情がにじんでいた。

「真面目な話、坂の数は降りより登りの方がかなり多いんじゃないか、と俺は思っているんだ。」

「どうして。」

人をひっかけておいて、こいつも存外身体の奥では私と似たようなことを感じているのだろうか。

「夏目漱石の『草枕』の主人公がさ、ほら、『智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい』って考えたのは、山路を登りながらだったろ。あれがもし降り坂だったら、彼はそんなふうには考えなかったんじゃないかね。」

「智に働いても角が立たないのか。」

「いや、そもそも降り坂では人間の思考力は働かないのかもしれない。そう、働かないんだよ。」

「そういうえ俺が最近読んだ小説の中には、男というのは坂を降りる時が最も男臭くなるものだ、と書いてあったな。」

「すると、日本中の男が坂を降り始めたら凄いいことになる。」

「男にはもう住めないよ、臭くて臭くて。」

「女の場合はどうだろう……。」

飯沼要助の声にふと氣弱げな湿りが感じられた。

「坂の下で、降りて来る男でも待ち構えるさ。」

「女が降りる時は。」

「それはもう、何も考えんだろう。」

「どっちにしても性的な存在になりきるわけか。理性的でも知性的でもなくて、ひたすら性的な。」

「性的になれば、確かに思考力は鈍るだろうよ。」

「交尾している犬なんかは、でも、考え深げでもあるがねえ。」

飯沼要助は眼尻に皺を寄せて酸いものでも噛み潰したような笑いを浮かべた。昔からそれが一番彼らしい顔だった。

「坂の傾斜にもよるのかもしれないな。」

ふとなにかを掴み出して来る目付きになって彼が言った。

「なんだか坂にこだわるね。」

「俺の家がさ、坂の上にあるんだよ。」

「坂の上の家とは素敵じゃないか。国立くわちだって、さっき言ったな。」

「駅は国立で降りるんだ。でもそれがおかしな坂でさ、五百メートルもあるかないかなのに、登っているうちに国立市から国分寺市に変わって、あつという間に今度は府中市になる。」

「急な坂なのか。」

「そういう説もある。」

「実際にはどうなの。」

「国立のあたりは来ることがないかね。」

「自分の通勤する区間ではあちこち途中下車する機会がいくらでもあるけれど、それを越して都心とは逆の方に行くことはまずないね。俺にとっては、降りる駅が終点だよ。」

「それじゃあ、多摩蘭坂といっても知らないな。」

「有名な坂なのかい。」

「地元ではね。」

「由緒のある。」

「それが問題なんだ。実はな、少し勉強したんだよ。」

「昔から俺より勉強家だったよ。」

「図書館などという所に何十年振りかに出かけたんだから。」

空になっていたハイライトの袋を握り潰し、煙草とビールと一緒に注文すると飯沼要助の顔は俄かに汗とも脂ともつかぬもので光り始めた。

君は坂を登って家へ帰るといふ経験があるか、と要助は詰問に近い口調を私に向けた。同じ中央線沿線の武蔵野に住んでいるとはいえ、私の家は起伏から見放された平坦な土地の只中にある。今日、帰宅する電車の中で十数年振りに飯沼要助にばったり出会ってこの店の椅子に坐るまで、坂の上の家に思いを寄せたことなど絶えてなかった。生れた家も、そこから移って育った土地も、要助と知り合うようになった学生時代の住居も、すべて平らな土地の上にあつた。

そんな気の利いた場所には住んだことがない、という私の答えを聞いて、彼はゆっくり首を

横に振った。それは私を憐んでいるようにも、羨んでいるようにも見えた。

要助の場合、家へ帰るのと坂を登るのは全く同じことでしかない。明るい街燈に照らされた商店街を抜けた後、丈の高い水銀燈がぼつんぼつんと灯る坂道を俯きがちに登っているうちに、少しずつ身体が家に向けて馴染んで来るのだという。いや、家の中にはいり難いものを削ぎ落とし、それでも残る固い異物を碾き潰し、ようやく家の扉をくぐる滑らかな身体が出来上ってくる。そのために、帰りのバスは一つか二つ手前の停留所で降りて歩いて坂を登ることが少なくないらしい。十一時を過ぎて最終バスが出た後は、駅からタクシーに乗らずに二十分近くもかけて歩き続ける折も多く、その最後に坂にかかるわけである。

それは帰宅の儀式のようなものなのか、と私は訊ねてみずにはいられなかった。むしろ帰宅に伴う必要悪じゃないのかね、と要助はまた彼特有の酸いものを囁んだ時に似たどこか眩しげな笑いを顔に拡げてみせた。

要助が坂を登る自分を意識しはじめたのは、勤め先にアルバイトで来ていた女子学生との仲に関係があるらしかった。当初は冗談のような小さな贈り物の遊びが、いつの間にか自分でも驚くほどの意外な熱を孕み、遂には妻に隠しきれぬものにまでふくらみあがっていた。それに気づいて問い詰める妻の疑いを否定しなかった夜、妻は突然立上ると玄関を出て小道を走り、バス通りの坂を一気に駆け降りて行ったのだ。バスの停留所まで後を追った要助の眼に、丈の